

編集室紀行

本の旅に出よう：物語に見るグリーフケアの世界

『教育の地平線』欄に登場いただいた重松清さんの小説は、中学や高校入学試験問題(国語)で出題される作家・作品ランキングで圧倒的な1位の座を保っています。市井の家族や学校生活を平易な文体で描写するあたたかな世界観がその人気の背景にあり、若い世代の支持も高い、現代を代表する作家の一人です。

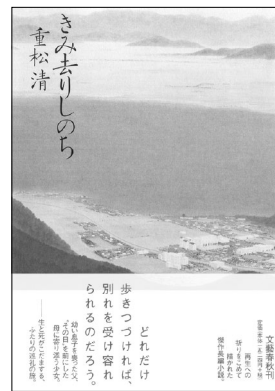
近作『きみ去りしのち』は、満1歳の息子を乳幼児突然死症候群で喪った42歳のセキネさんが主人公。大切なひとの死を受容できない彼は、妻の陽子としばし離れ全国を旅することを決めます。その計画に、元妻に引き取られてからずっと音信不通だった娘の明日香が同行をせがんでくる。折しもその母美恵子は末期がんを宣告され、ホスピス入りを決めることになります——。

グリーフ(grief)ケア、ワークは、一般に「喪の仕事」と訳されるように、人間は何らかの作業を通し、しかるべきプロセスを経て心の痛みを癒して、現実に向き合っていく。その過程で専門職が果たし得る役割の意義は、古今東西で変わりません。

また、「悲嘆は大切な人との死別を予期した時点から始まる」(『看護大事典 第2版』小社刊, 826頁)と、予期的な悲嘆に対するアプローチの意義もかねて指摘されています。セキネさんは今ある悲しみに加え、迫り来る元妻の死と実娘の悲嘆という近未来の出来事をともに抱え、旅に出ることになるのです。

恐山、賽の河原。奥尻、震災と津波の傷跡。オホーツク、流水の浜辺。ハワイの追憶。阿蘇の野焼き。奈良、子どもシェルターの花畑。鳥根、サンドミュージアム。与那国、終末期医療の昼。鳥原、精霊流しの夜。

掻い摘めばこれだけの道程が、セキネさんの物語には必要でした。「看護師さんに一番小説を読んでほしい」



●重松清『きみ去りしのち』

2010年 384頁 定価：1,600円(税込)
文藝春秋 TEL：03-3265-1211

「あの子に最後にさわったのは、お医者さんと看護師さんだったでしょ。わたしやあなたじゃなかったでしょ。そんなのっておかしいでしょ、ねえ、おかしいと思わない？」 (308頁)

と語る重松さんの思いとともに、本誌読者の皆さんとこの道行きを共有できたらと願います。(編集室)